

# センタージャーナル

〒460-0016  
名古屋市中区橋二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



「真宗門徒講座」で「私にとっての親鸞聖人」を語る教化センター研究生。大勢の聴講者から、自身が今まで何を承ってきたのかが問われる。なお、第11期研究生を募集中。(詳細8面)(写真の無断転用はご遠慮下さい。)

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを  
真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・大谷派の近現代史  
戦争をできる国に戻してはいけない ②・③  
—念仏者として—
- ・現代社会と真宗教化  
震災とお寺・坊さんの役割 ④・⑤
- ・現代社会と真宗教化  
児童虐待・DV環境から、⑥・⑦・⑧  
安全安心の生活を
- ・INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

## 信順を因とし疑謗を縁として

絵画にはキャンバスという限定された面積がある。「センタージャーナル」の紙面にもそれがある。社会の多様な面を一面ずつ切り取り、聖教の伝承との間に身を据えて、わずかに九面に詰め込む。本誌の使用は真実を伝えることであろう。

しかし最も大切なのは、何が私に伝えられてきたのか、そこから何を承ったのか。その「伝承」を読者とともに考えていくことではなからうか。

釈尊は信仰の「伝承」について二人の画家の譬を語ったという。一人の画家は半年間、腕をふるい絵を描き、もう一人はひたすら壁を磨き続けた。そして描かれた絵は大変見事で誰もが驚嘆し、反対側の絵は、それよりももっと深みがあり全ての者が感嘆したという。壁を磨き続けた画家は「これは私が描いた絵ではありません。磨き上げた壁に彼の絵が写っているだけです。これが素晴らしい絵だとすれば真向の絵が素晴らしいのです」と。この言葉に皆、感服したという。

描いた画家は神通第一の目連尊者、ひたすら磨いた画家は智慧第一の舍利弗尊者である。舍利弗尊者

者の智慧は全てのものからありのままの美しさを引き出し映し出す。自分を誇り我が才能を表に現すことなく、一人ひとりの持ち味や尊さを一人ひとりに気づかせる智慧のはたらきであった。

五月中旬、教区教化委員会では本廟奉仕に赴き、久留米教区の草野信之教導から「伝承」について学んだ。「教化を、私が他者に教えを伝え、その人を化していくと考えると、しまいがちですが、そうではないのでしよう。私が教えられ何を承ったのか、自らが開化されたことが伝わるのです。」と、伝承の意義を語られた。

何かを伝えなければと躍起になつていた私が、じつは「いたずらにあかし、いたずらにくらして、年月をおくるばかり」の体たらくぶり。「これまことになげきてもなおかなしむべし」と映し出された。まさに念仏に対する疑謗なのである。私は疑謗している事実を見逃すことなく、信謗ともに浄土に生れる因縁とせよと催促して下さる。

(主幹 荒山 淳)

## 戦争をできる国に戻してはいけない

## —念仏者として—

同朋大学大学院教授

田代 俊孝 氏



この春に行った第二十五回平和展「仏の名のもとにヤスクニへ」(教化センター主催)において、現代社会が抱える問題として憲法改正や集団的自衛権行使の問題を提起しました。その際に『中外日報』(二〇一三年十月三十一日付)に掲載された時流ワイド「中外コメンテーターに聞く」を取り上げました。この特集は、宗教家(中外コメンテーター)に憲法改正や集団的自衛権に対する認識を尋ねる内容でした。この記事中、同朋大学大学院の田代俊孝教授の回答が、あたかも改憲や集団的自衛権の行使を容認する立場かのように誤解されかねない編集内容となっていました。田代教授に念仏者の視点から論じていただきました。

現安倍内閣では、「憲法改正は私の歴史的使命」と公言し、憲法第九条、それに改憲発議要件を規定した九十六条の改正を表明している。また、昨今では集団的自衛権を解釈論で認めようとして、与党内調整をしている事は、連日の報道の通りである。世界に誇る戦争放棄の平和憲法が骨抜きにされていくことは見るに忍びない。それについて、当センターが毎年、『平和展』を開催し、仏教の立場から平和への意識啓発に力を注いでいることは大変意義深く、大切なことである。

ところで、昨年(2012年)の平和展で『中外日報』昨年十月三十一日付の紙面に掲載された「高まる改憲論議―戦争をできる国に戻ってはいけない―」の記事が紹介

されていた。その中に筆者に関する事も書かれていたが、そこでは筆者の考えが十分に表現されていなかったの

で改めて述べてみたい。

『中外日報』が識者をモニターに指名してアンケートを行い、その結果を記事にしている事は、興味深い試みであった。このアンケートには、設問①に「憲法改正に関する是非」、設問②に「改正について定めた九十六条改正に関する是非」、設問③に「自衛権についてどうお考えですか」など七つの三択(五択)の設問があった。そして、その回答をまとめたものが上記見出しの記事になっていた。

問題の箇所は、アンケートの設問③の自衛権について、その記事の中で、

筆者が改正反対であるとの立場を示さず、「一方、集団的自衛権の明記が必要だとする八人(回答者)は「他国との協調を図るため」(田代俊孝・同朋大学大学院教授)・・・などと、現実の国際状況を考慮した場合にはやむをえない、との立場である。」とあり、筆者がそれを認めているかのような記述になっている所である。

この設問の前に設問①では、「憲法改正に関する是非」、設問②「改正について定めた九十六条改正に関する是非」を問い、筆者はいずれも「反対」と答えている。そのことを記事には書かないで、設問③のみを取り上げて記事にしているのである。筆者は憲法九条、九十六条についても改正に反対の立場に立って、その上で設問③「自衛権についてどうお考えですか」の問いに「その旨を憲法に明記すべきである」と答えているのである。その意図は、解釈論によって、なし崩し的に自衛権、集団的自衛権を認める事は反対であるとの立場である。昨今、安倍内閣が集団的自衛権を解釈論で認めようとしていることに対して反対しているのでは

る。仮に、集団的自衛権を主張するなら明文化し、現憲法の規定によって民意を問うべきであるとの立場である。

筆者は、一貫して、憲法九条、九十六条についても改正に反対している。そして、集団的自衛権についても、解釈論によって、なし崩し的に認める事に反対との立場である。微力ながら地元の市民組織の「九条を守る会」にも参加させていただいているし、日本ペンクラブのこの問題に対する主張にも会員として同意している。安倍内閣が集団的自衛権を解釈論で認めようとしていることに対して、これらの活動の中で明確に反対しているのである。

集団的自衛権までも解釈論で認めようとすることに無理があることは、国会内で「憲法の番人」だった元内閣法制局長官の阪田雅裕氏でさえ指摘している。ましてや、閣議決定で押し通すと言うことは、もちろん、それが立憲政治の根底を揺るがす事であることはいうまでもない。安倍首相は国会の衆院予算委員会で「(解釈改憲の)最高責任者は私だ」と言い放ち、また「閣議決定で(解釈改憲を)初めて確定する」(衆院予算委)とまで明言した。近隣諸国と共生し、回答のコメントに記したように「他国と協調して」お互いに認め合って生きていかねばならない。それには戦争を放棄する以外にないことは

いうまでもない。

そもそも、自他の命を奪う事が仏法の教えに照らして許されるはずはない。まさしく仏陀の「国豊かに民安し。兵戈用いることなし」(『仏説無量寿経』<sup>ひょうが</sup>)という教えの通りである。自己の欲望のために他の命を犠牲にしてはならないことは、筆者がライフワークとしている生命倫理でも同じである。かけがえない「いのち」を戦場に送ってはならない。

かつて、近隣諸国を侵略し、多くの命を奪った戦争の責任は、戦後に生を受けた筆者たちにおいてもそれを共業<sup>くわうごう</sup>、つまり共に背負っていかねばならない業として受け止めねばならない。しかし、現実には自我が強く自己を正当化し、なかなか気づけない。気づけるのは法との出会いを果たした者のみであり、その法のはたらきによってのみ自覚させられるものである。

中国の善導(六一三〜六八一)のこゝとばで、親鸞の救済の論理の中核をなすものに二種深信という概念がある。二種深信とは、「機の深信」と「法の深信」のことであり、機の深信とは、「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫<sup>くわうこく</sup>より已来<sup>このかた</sup>、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。」との文で示され、私たちの罪悪がいかに深いかという自身における罪の自覚である。

「法の深信」とは、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。」と示され、自己を照らす本願のはたらき(光)の自覚である。しかし、そこでいう「自身」とは、万人に共通する自身である。『歎異抄』の「親鸞一人がため」という意味が「親鸞ひとりだけ」という意味でなく、全人類を負荷する主体的な立場での「一人」であることはいうまでもない。一般的に二種深信は、「わが身」の上における問題として受け止められているが、「われら」としても受け止めることもできる。共同で犯した罪、つまり、社会的罪悪を「われら」の共業として自覚(深信)したときに、「われら」が共に本願に救われていく道が開けてくるのである。この「われら」とは同時代に同じ課題を共有する「われら」でもあり、時間を越えて過去の人との課題を共有する「われら」でもある。侵略戦争を引き起こした過去の人の罪業も、「われら」の罪業として引き受けていかねばならない。過去の反省とその自覚に立ったとき、「われら」は非戦の道を歩むよりほかにない。

近時、このような立場は「自虐的歴史観」と言われ、過去の罪業から目を逸らそうとする発言があるが、法との出遇いを果たしていない者のことばと

して悲しく思われる。照らしてくれるもの(法)に出遇っていないと自分が見えない。迷っている人は、それが迷いであるとは解らない。正信(真理)に出遇わないと迷いは晴れない。迷いの世界に入ってしまうと、まじめな人は、ややもすると戦争にもまじめになつてしまふことがある。衆縁によつて共生を説く仏教の教えに立てば他者を

殺す事が許されるはずはない。目先の利益のために真理が見えなくなっている自己自身を問い直し、戦争の道を開く改憲論議に改めて関心を深く持ちたい。

なお、筆者は『中外日報』の謝罪を受け容れ、三月二十七日付の紙面と同社のHPに筆者の見解を改めて掲載している。

「他国防衛権」(自国が直接攻撃されていないにもかかわらず、実力をもって阻止する権利)ともいえる集団的自衛権。日本政府は、その権利を保有してはいるが日本国憲法九条によつて「行使できない」もしくは「禁じられている」と解釈しています。しかし、安倍首相は国際的な社会状況を理由にして、憲法解釈を変更することで集団的自衛権の行使を可能にしようとしています。<sup>1)</sup>

真宗大谷派は、こうした「戦争する国へと戻るような動き」に危機感を持ってきました。二〇〇九年六月九日に宗議会は(参議会は翌十日)「ソマリア沖の海上自衛隊の即時撤退を求め、海賊対処新法案制定に反対する決議」を可決し、自衛隊がソマリア沖の海賊行為から民間を護衛することは、「集団的自衛権行使の事実上の先例」であるとして批判し、反対の姿勢を明確にしました。また、二〇一四年六月十日に宗議会が「集団的自衛権の行使容認に反対する決議」を可決しました。仮に集団的自衛権を行使したとすれば、「日本人が国外で人命を奪い、奪われるという事態が現実となりかねない」とし、「戦後、日本が堅持してきた戦争放棄の国是を捨て去ること」に他ならないと指摘しています。

第二十五回平和展「仏の名のもとにヤスクニへ」でも、憲法「改正」や集団的自衛権の動きを問題にしました。その際に取り上げたのが、『中外日報』(二〇一三年十月三十一日付)に掲載された時流ワイド「中外コメント」に聞く」の記事でした。この特集記事で三十八人の宗教家(中外コメント)が改憲の是非を論じました。今回、玉稿を賜りました田代教授の他には、同朋大学の尾畑文正名誉教授が「不殺生に学ぶ仏教徒であれば、殺生を前提とする戦争に反対するのは当然の態度」と自衛権と自衛隊を違憲であると主張されました。

こうした動きの中で私自身が考えずにおれないことは、仏教の教えが社会的な状況によつて変化するのだろうかという疑問です。仏教は普遍性を持った教えです。普遍性を変えるのは、人間の都合です。田代教授が指摘された、法との出遇いによつて「機の深信」が開かれてくることを鑑みると、殺伐とした世の中にこそ、仏教の教えがゆきわたるべきであると、あらためて感じました。

(研究員 新野和暢)

<sup>1)</sup> 安倍首相は第一八六回国会期間中(六月二十二日まで)に閣議決定する意向だったが、今国会中の合意を見送る事になりました。朝日新聞(六月二十日付)によると、政府・自民党が集団安全保証(国連軍や国連決議に基づく多国籍軍が制敵すること)について、日本が武力行使をできるようにする方向で調整に入ったと報じている。

現代社会と真宗教化

2014年1月31日(金)~2月1日(土)

都市教化部門 同朋社会支援事業 現地研修会 講義抄録

## 震災とお寺・坊さんの役割

仙台教区花巻組 碧祥寺住職

おわた せんしょう  
太田 宣承氏

二〇一四年一月三十一日〜二月一日、教区教化委員会（都市教化部門）の同朋社会支援事業現地研修会が実施された。その中で震災以降幾度も現地を置き、現在も活動を続けている太田宣承氏に講演をいただいた。

人としての悲しみが浮き彫りになった被災地で、氏が受け止めてきたことの一部をここに紹介し、現代社会において地域社会と寺院のあり方について考える一助としたい。

## 【被災地に向かわせた原点】

私の寺は岩手県内陸部の秋田県境にあります。東北地方の背骨、奥羽山脈の山の中にあり、冬期は大変雪深い所です。沿岸からは車で三時間ほどの所にあります。震災直後、東北全域でライフラインや物流が麻痺し、数日は食糧や燃料が入ってきませんでした。私は父が開いた高齢者福祉施設を運営していましたので、沿岸部が気になりつつも、今は私が預かっている施設のお年寄りを守ることに専念すべきだと、自分に言い聞かせていました。

ある時、ご両親と音信不通であった釜石市出身の職員が、涙が止まらなくなっていました。彼女はこういう時こそ仕事で迷惑をかけるなど育てられていた。けれども、とうとう耐えられなくなった。それを見た他の職員たちが「こっちは大変だけど行かせてやってください」と言ってくれました。そこでお姉さんが行方不明だという山田町出身の職員と一緒に沿岸に行かれました。

釜石市出身の職員は避難所で両親と再

会できました。しかし、山田町の職員からは「見つかりました。でも姉さん、お年寄りを守るように脇に抱えて亡くなっていました」という報告を受けました。

私はそれを聞き、今はまだだと言いつつ悲しい自分が恥ずかしくなりました。悲しみを抱えながら気丈に今を生きている職員や、お年寄りを放っておけずに一緒に亡くなったというお姉さんの姿勢に、私は強く突き動かされました。

## 【「遺体安置所を巡った背景」】

沿岸に入る前、ある方がいつもより険しい顔で「大変なことが起きたな。神も仏もねえってこういうことなんだな」と私に言いました。この世に依り処などあるのかという強い憤りです。それは僧侶として生きる私の存在を厳しく問う言葉でした。

そんな折、二人の方の話を聞いてほしいと依頼を受けます。一人は消防団で遺体の搬送をした二十代の男性です。彼は施設でお年寄りの最後を看取った経験があり、ご遺体には慣れていると自負し

て臨みました。しかし首がないご遺体や焼けたご遺体など、最前線は凄惨な状況であり、生きている人を連れ戻すことはできませんでした。彼は「僕のしていることに何の意味があるのか」と思いつめ、死を見つめ過ぎて次第に自分が生きている意味さえ見失い、罪悪感すら抱いていました。

もう一人は二十代の女性でした。行方不明のお姉さんを安置所で探す中で見たご遺体はあまりに凄まじい姿だったそうです。会いたいけど会いたくない、大好きだからこそ現実に向き合うのが怖いという心情を「私、変でしょうか」と涙ながらに話されました。

この出あいを通じ、今、沿岸部には震災で被った喪失感を埋められず、現実に向き合えない人たちが大勢おられることを知りました。私は自然に間衣・輪袈裟を持ち歩くようになり、支援の合間にご遺体の安置所でお参りをするようになりました。ご遺族や、黙々とご遺体の維持管理をされていた警察の方々と共に「あなたがこの町で生まれ育ち、この町を愛して生きたことを、私は決して忘れません」という気持ちで手を合わせました。「拜んでなんになる？帰ってこねえじゃねえか」とも言われました。しかしこれからは生きていく人たちのために、いのちは死んで終わりではない」ということを伝

えたい一心で歩きました。それはこれままで「僧侶として生きよ」と育てられ、願われた私の生き様を問う歩みでもありました。

## 【双方方向のありがとうプロジェクト】

震災直後は顔も名前も知らない人たちが集まった避難所で自然発生的にコミュニティが生まれ、彼ら自身が一生懸命ボランティアをしていました。女性は入ってくる物資の分配や食事を作り、男性は火を焚くために薪を集める。その後、ようやく入った自衛隊によって多くの生命が救われました。しかし自身の役割がなくなってしまう、考える時間だけが増えて心を壊す人たちが出てきたそうです。一方的に支援して役割や自立心を奪ってしまうことの怖さに気づかれました。

この経験から、四月中旬から約三ヶ月間、私の町に陸前高田市から一〇五名の方が一時疎開にいられた時には、町の人たちと一緒に生活してもらおうと考えました。お花見から草取りや窓ふき、ドブ掃除や障子貼り、お寺の行事への参加など、共に汗水を流しました。だんだん「この車、洗ってやっから」などと進んで

仕事を見つけてくれるようになりまし。きれいな。きらいになつた車で、今度はこちらが手続きや物資の配送のために高田へ送迎するというやり取りも生





まれました。女性陣に高田の郷土料理を作ってもらった時には「二ヶ月ぶりに包丁握った！」と涙を溜めておられました。当たり前だった自分の役割を失うことはそれほど辛くないことなのです。人はどのような状況でも、役に立ちたい、愛されたい、必要とされたい。そしてどんな人にも、その人にしかできない役割があるのです。それを奪われることは存在の喪失と同じことなのだと教えられました。

ある時「おらにもなんかやることねえすか」と腰の曲がったおばあちゃんが来て、外のバケツの食器類をシヤカシヤカ洗い始めました。申し訳ないと思いましたが、腰が曲がってるからちようどいい高さなんです。一緒に洗っていると、「着の身着のまま逃げたよ。水が膝まで来ておっかねかったあ」「おれはひとりここで逃げて来たの。この腰だけで迷惑かけから、いねえほうがいいなと思って」

とずっと一人で抱えこんでいた胸の内をぼつぼつお話ししてくださいました。

「被災された方々は何に苦しみ、何を求めておられるのだろう」と身構えている内は、何も聞こえてきませんでした。しかし一緒に汗水を流し、喜び、泣き、笑い、それぞれが自分にできることを見つけて作業を通して、はじめて本音を漏らして心を許し合う間柄が生まれてきました。

人の悲しみに触れれば手を貸したい、支えたいと思うのは自然なことです。しかし、支援者が活躍するために苦しんでいるわけではありません。被災地では主語が逆転した現象が沢山見られました。共に生きる世界とはどういうことか。それは多くの関係が断ち切られてしまった被災地だけで回復されるものではなく、むしろ何も失っていないけれど、いつの間にか個人の関心に埋没して大切なものを見失う私たちこそが回復しなければならぬのだと気づかされました。

【「忘れない支援とは何か？」

今、仮設住宅では「比べる」ということが起きています。みな同じ気持ちで励ましあってきたのに、時間が経つと「あんたは○○だからいいよな」という比べる思いが出てきます。すると隣の人は本音で話せなくなってしまう。中にはちよつと不穏な空気の仮設住宅も出てきています。ですから今、外部の第三者に気持ちを聞いてほしいと言われます。たとえ一日でもいいから、一度仮設を離れて、そこで胸の内を吐き出したい。そんな状況の中で、子どもはどんどん居場所を失っていきます。周りを気にせず思いつき遊びたい。自分が自分らしくあること

ができる場所、は誰にとっても必要なのです。誰もが肩の荷を下ろせる場所、ありのままでもいい場所、子どもに帰れる場所です。

大切な人を失った痛みや後悔の念は消そうとすればするほど、苦しさが増していきます。「排除したい、でも逃げられない。これは私が一生背負っていくものだ」と引き受けた人たちはとても良い目をして今、前を向かれています。そういう方々がまだ悲しみの底にある人に自然に寄り添い、支えていっています。強さも弱さも尊重しあい、共なる歩みを開いていく場であってほしいという願いが、今お寺という場にかけていると感じます。

現地へ足を運ばなくても、いざという時に最初に何をやるのか、どうやって自分の身を守るのか、家族とどうやって安否確認をするのかということを含んで考え話し合う。お寺を開き、地域のみんでそれぞれの役割を考えて、一緒に今を生きていく。それが震災を忘れない、背負っていくということだと思います。

(文責編集部)

名古屋別院で太田氏が講演します

- ・ 8月3日 午後6時～ 人生講座  
「忘れない大震災～後悔と共に生きる～」
- ・ 8月4日 午前6時15分～ 暁天講座  
「一人十色の世界観」

問合せ 電話 052-331-9578  
(名古屋別院教化事業部)

【編集余録】

太田さんは岩手県西和賀町(旧沢内村)で生まれ育った。戦後、岩手県は日本で最も乳児死亡率が高く、中でも沢内村は豪雪・多病・貧困に苦しみ、日本一乳児が死んでいく村であった。その中で故深澤晟雄氏が村長として「生命尊重の行政」を掲げ、乳児及び高齢者の医療費無料化などの政策を他に先駆けて実現していった。いのちの行政を推進する中で、その右腕として活躍されたのが彼の祖父、太田租電氏である。昭和三十七年、日本で最も乳児死亡率の高かった村で、ついに年間乳児死亡ゼロ、赤ちゃんが一人として亡くならなかったという偉業が日本で初めて達成された。

そのような願いの中で育った彼の信念には、故郷への報恩の念が深く根付いている。津波の惨状の只中に佇み、これは存在の歴史全体の喪失なのだ、氏は非常な痛みをもって見つめておられた。

今、お寺に何が求められているのか。寺檀制度に守られてきた寺から、全ての人の願いに応じる場として開かれることが切に願われていると感じる。そのご縁の中でこそ、一人ひとりのいのちは輝いていく。私たちが後に歩む人たちに紡いでいく経糸の指標として、彼の故郷の若者の言葉を紹介して余録を閉じたい。

「私たちは

守られて生まれてきました」

(業務嘱託 大河内 真慈)

# 児童虐待・DV環境から、安全安心の生活を

真言宗僧侶／いのちに向き合う宗教者の会 会員  
 一般社団法人メッター理事長

今城 良瑞氏  
いましろ りょうずい



教化センターが後援する「いのちに向き合う宗教者の会」(宗教・宗派を超えた有志僧侶で自死遺族の支援を行っている会)の会員は、それぞれに現代社会の問題と向き合い活動している。

なかでも、今城良瑞氏は、虐待やDV(ドメスティックバイオレンス)の被害者の救援・支援活動を続けている。そして、子どもたちを少しでも早い段階で救済し、安全な場所で安心して生活できる場を確保する必要があると考え、「一般社団法人メッター」を立ち上げて、虐待などで親と生活できない子どもたちを養育する「ファミリーホーム(小規模住居型児童養育事業)」の設立を目指している。

今回、今城氏取材し、同氏の活動の原点ともいえる一人の青年との出会いについてお話いただいた。



ファミリーホーム設立の為の募金活動

## 「言えない心の傷」

二〇〇六年八月、ソーシャル・ネットワーキング・サービス「mixi(ミクシイ)」に、「言えない心の傷」というコミュニティが立ち上がりました。

虐待やDV、いじめ、レイプなど、トラウマとなる経験をした二万人以上の人々が「辛い」「苦しい」「死にたい」「消えたい」という想いを書き込んでいます。また、リストカット、薬物の過剰摂取(オーバードーズ)、過食症や拒食症といった摂食障害の人も少なくありません。セックスに依存している人もいます。

そういった人たちの書き込みに対し、ひとつひとつ返信していくのがコミュニティを運営する管理人の役割です。

このコミュニティを立ち上げたのは、「のりを」(ハンドルネーム)という十八歳の青年でした。彼の存在を知った時には「わずか十八歳の青年が、他人の為に

なんと努力しているのだろうか！」と驚きと感動を覚えました。「のりを」はたった一人で、「辛い」「苦しい」という書き込みに対して、とても丁寧に返信をしてきたからです。

## 「のりを」の生い立ち

「のりを」は、父と母、三人兄弟の三男として生まれました。物心ついた頃にはすでに虐待を受けていたそうです。家中では、お酒を呑んだ父親が母親に暴力を振るい、そして母親が子どもたちに暴力を振るうという構図ができていました。

少しでも母の機嫌を損ねると何時間も正座させられ、怒鳴られ、殴られ続けました。母はアイロンを片手に、子どもたちに対して「言うことを聞かなかったら、お前らを焼くぞ」と脅し、実際に焼かれることもありました。しかし母は、父の前では何もしませんでした。父

の暴力に怯えていたからです。

「のりを」が幼稚園の時、長男が腎臓の病気になる大手術をしました。背中からお腹にかけて、大きな手術跡が残る大手術でした。プールの授業の際、手術跡を同級生に見られたのがきっかけで、長男は学校でいじめにあいました。

さらに、長男に続いて次男もいじめにあいました。理由は、いじめられている長男の弟だから。こんなことでもいじめは始まるのです。家では、両親は相変わらず不仲で、争いが絶えませんでした。兄弟は震えながら押入れに隠れる毎日でした。

「のりを」が小学三年生になった頃には、三人の兄弟は著しく性格が変化してしましました。長男は極端に無口になり、次男は学校では無理して笑い、家ではあまり話さなくなりました。「のりを」は学校では明るく振舞い、家では無口でした。そしていつも「死にたい」と考えるようになっていました。

そして「のりを」は、大人は誰も信用できなくなっていました。両親の不仲、酒乱の父、理不尽に子どもを殴る母、兄弟が学校で受けるいじめ、それを見て見ぬふりをする教師。すべてに絶望した「のりを」は、刺身包丁を腹に突き刺して自殺しようとしたが、次男がそれを止めました。「のりを」はずっと泣き続けました。

じめはエスカレートしていったようです。溜まりに溜まった長男は、家庭内で暴力を振るうようになりました。

ある日のこと、長男が学校から帰るなり「のりを」を殴り始めました。いつまで続くのか分からない兄の暴力。「のりを」の骨は折れていました。長男は学校でのいじめのストレスを、そのまま彼にぶつけたのでした。その日から、「のりを」は毎日のように長男からの暴力を受けました。リモコンで殴られる日もあれば、棒で殴られる日もある。紐で首を絞められ、ご飯が食べられないほど口の中が切れることもありました。骨は折れ、歯は欠け、ポロポロになる毎日でした。

「のりを」は、幼い頃から空手を習っていて、中学生になると「のりを」の方が長男よりも体力的に強くなりました。当時、彼は両親と長男を殺すのだと決めていたそうです。

ある日、長男と喧嘩になった「のりを」は、近くにあったスパナで長男の頭を殴りつけました。割れた頭から大量の血を流して倒れる長男を見て、「のりを」は笑ったそうです。「これでやっと一人死んだ。あと二人…」

実際には、長男の傷はたいしたことではなかったのですが、両親は「のりを」を激しく叱りました。両親に殴られながら「今まで、散々ボクを殴りつけてきたのはお前らじゃないか！」と心の中で叫びました。

**殺したい、愛されたい**

その日の夜からリストカットが始まりました。毎日リストカットすることで、自分の中に溜め込んでいるものを解放していました。自殺したい願望とリストカットの傷跡を持ったまま「のりを」は高

校に進学しました。「のりを」は当時を振り返り、心は氷のように冷たく、自分が自分でないようだったと言います。

自殺未遂もありました。もう本当に限界だったある日、「のりを」は酷い頭痛に見舞われて倒れ、救急車で病院に運ばれました。検査を受けましたが原因はわからず、最終的に精神科で受診することになりました。

「のりを」は、医師にすべてを正直に話しました。涙が溢れ出てきて、負の感情が全てを包み込むようだったそうです。

「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」これが「のりを」に与えられた病名でした。「のりを」の心は、とうの昔に壊れていたのです。

感情を取り戻すのが最初の目標でした。しかしこれまで感情を無くすことで自分を守ってきたのですから、生きるための最後の砦を壊すのは本当に辛く苦しい作業です。懸命に自分の心と向き合いました。フラッシュバックに苦しみ、リストカットもどんどん酷くなっていく中で、「のりを」は本やインターネットでPTSDについて徹底的に調べました。

そして、あるサイトにたどり着きました。そこには「自分の事を許してあげて欲しい」「泣いても良いんだよ。苦しかったら苦しいって言っても良いんだよ。悲しかったら悲しいって言っても良いんだよ。辛かったら辛いって言っても良いんだよ」と書かれていました。

「のりを」は号泣しました。感情がなかった「のりを」の心が揺さぶられた瞬間に憎んでいる反面、親から愛されたいとも思っていました。この矛盾する二つの想いに苦しみ続けました。

## 心が溶け出した

大学1回生の夏の夕暮れ、空が紫色に染まっていく中、ある風景がふと目に留まりました。

それは、父親と母親の間で小さな男の子が手を繋いで歩いている姿でした。母親の手には買い物袋、とても幸せそうな後ろ姿でした。「のりを」は足を止めてその姿に見入っていました。ありふれた普通の家族。でも、夕日を正面にして歩くその姿が、とても綺麗だったそうです。その家族が見えなくなるまで、「のりを」はずっと眺めていました。

目から涙が溢れました。羨ましかったのかもしれない。自分もああいふ家族になりたかったのかもしれない。本人にも何故なのかは分からない。ただ、「のりを」の心の傷を優しく包んでくれたような気がしたそうです。凍りついた「のりを」の心が少しずつ溶け出していたのでしょう。

その日の夜、「のりを」は心がいつもよりも軽くなったような気がしたそうです。涙が何かを流してくれたのかもしれない。そして、急に「のりを」の視野が広くなりました。

痛みを知る事で優しくなる事が出来る。心の痛みという見えない闇を、僕は感じる事が出来る。なぜなら、僕自身が通ってきた道だから。まだ



風邪をひいた今城氏に宛てた「のりを」君の手紙

通っている途中だけど、どうやってここまで乗り越えてきたのかは知っている。

今、世の中には、誰にも言えず深い傷を負ったまま生きている人がいる。誰にも悟られないように傷を隠して生きている人がいる。居場所も無く、ただ苦しみながら生きている人がいる。涙さえ流せないほどの絶望の中で生きている人がいる。今までの自分がそうであったように。そんな人たちの居場所が必要だと、「のりを」は考えたのです。

逃げても良い、生きてさえいれば。生きていけばきつと傷は癒える。生きる事から逃げなければ、きつと大丈夫なんだ。それは、半ば願いにも近い気持ちでした。

## そして…ミクシィへ

「のりを」は「mixi」に「言えない心の傷」というコミュニティを立ち上げました。自分自身の症状が悪くなり苦しみながらも、コミュニティ参加者に温かい言葉をかけ続けました。

PTSDの症状も快方に向かいました。そんなある時、「のりを」は自分の部屋にいて「退屈だな」と思いました。そして「退屈だな」と思えることがとても幸せに感じて、一人涙を流したそうです。

大学4回生の春、遂に「のりを」はPTSDを克服し、自分自身の心を回復させることができました。本当に嬉しい出来事でした。

現在、「のりを」はコミュニティの管理を続けながら自分の人生を歩んでいます。私はコミュニティからは離れていますが、彼とは連絡を取り続けています。

## 利他を以て先とす

私の活動の原点は「菩薩の用心は皆慈悲を以て本（もと）とし 利他を以

て先とす【菩薩の心は、すべて慈悲をもって基本とし、まず人のために考える】」（秘蔵宝論）という真言宗の教えにありますが、虐待などの青少年問題を活動の中心におき、それが続いているのは「のりを」との出会いによるものだと私は考えています。

「死にたい」「消えたい」と口にする人は、実際には「死にたい」のではなく「消えたい」のではなく、「辛い想いをどうにかしたい」と考えていて、それを端的に「死にたい」「消えたい」と表現しています。「生」と「死」を考えるとというのは、僧侶にとつて根本的な問題ですので、何処に行っても、どんな活動になっても離れられない問題だと考えています。

現在、一般社団法人メッターにおいて、ファミリーホームの開所を目指していますが、実現すれば、入所者が十八歳になるまで深く関わっていくこととなります。人と深く関わるということは、決して簡単なことではありません。苦しいことが多くあるでしょう。それでも、ファミリーホームを始めたことを考えています。

それは、自分が虐待を受けてきた人たちと多く接してきた経験から導かれたものであり、子どもたちのためということもあるでしょうが、それ以上に自分のため、自分の考える仏教者としての姿を完成させるために必要なことだと思っています。

団体名である「メッター」はパーリ語で「慈悲」を意味します。慈悲というのは、自分が他者に何かを施す上で、自分と他者との間に自我が介在しない状態であると私は考えます。あいつは助けるが、こいつは助けてやらないというのは、慈悲ではありません。「生」「死」の問題だけでなく、私の「自我」の問題にもこの活

## 一般社団法人メッター



虐待などの被害にあった子どもたちを養育する「ファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）」の設立を目指している。

ウェブサイト: metta.or.jp

今城氏のお話を聞き、私は祖父江文宏氏の言葉を思い出しました。現代という時代を抱えるさまざまな問題から、「あなたは何を信じ、何を心の中心にして生きるのか」と問われているのだと思います。  
(研究員 前田 健雄)

『悲しみに身を添わせて』  
(祖父江 文宏著) 同朋選書

現代をどういう時代として見るのかは、この時代をどう生きるのかということでしょうか。  
見るということは、時代の在り様を人の上に見て人の在り様を吾がこゝとして感じること、人々と共に生きようとするること、なければなりません。

動は関わってきます。  
私の活動は、他者がどうであるか、社会がどうであるか、という問題に触れながら、結局は仏教者として自分自身の問題、課題に向き合っているのだと思います。  
(文責編集部)

## INFORMATION

### 教化センター日報 ■2014年3月～2014年5月

- 3月5日 研究生・教化研修「第5回伝道スタッフ養成講座」参加
- 6日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加
- 14日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ①)」
- 17日 研究業務「平和展」準備
- 18～24日 研究業務「第25回平和展」開催
- 25日 HP「お東ネット」会議
- 28日 研究生・学習会「真宗門徒講座 事前学習会」

- 4月8日 研究生・教化研修「真宗儀式の教相(第13回)」(竹橋太氏)
- 14日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加
- 18日 HP「お東ネット」会議
- 研究生・教化研修「第6回伝道スタッフ養成講座」参加
- 22日 研究業務「第25回平和展」反省会
- 25日 研究生・実習「真宗門徒講座(宗祖親鸞聖人 生涯と教え①)」
- 5月9日 研究生・学習会「第8期生修了論文中間発表会」
- 12日 研究業務「平和展」学習会
- 20日 研究業務「親鸞聖人ノート」改定打合せ
- 23日 研究生・実習「真宗門徒講座(宗祖親鸞聖人 生涯と教え②)」
- 29日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
- 30日 研究生・学習会「被災地一泊研修 事前学習会」

## 平和問題公開講座 ヤスクニの闇へ

<講師> 辻子 実氏(ずし・みのる。日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会委員)  
「安倍靖国参拝違憲訴訟の会・東京」事務局  
日本バプテスト連盟靖国神社問題特別委員会協力委員  
著書に『靖国の闇によろこ』(社会評論社・2007)、『侵略神社』(新幹社、2003年)、共著として『武力で平和はつくりえない』(合同出版、2007年)など。

<と き> 2014年8月6日(水) 午後6時～午後8時30分  
<と ころ> 名古屋教務所 1階 議事堂  
<参加費> 無料  
<主催、問合せ> 名古屋教区教化センター 電話 052-323-3686

## 平和展スタッフ募集

教化センターでは、大谷派と戦争の関わりについて調査研究し、その成果を平和展にて報告・展示しています。平和展スタッフを募集しますので、関心のある方はお問い合わせください。

<要 項>・条 件 真宗大谷派の僧侶・門徒  
・内 容 月2回の学習会へ参加し、平和展を企画・運営していただきます。  
<問合せ> 名古屋教区教化センター(担当 新野、寺西) 電話 052-323-3686

## 研究生募集

### 第11期 教化センター研究生を募集します

<条 件> 名古屋教区寺院、教会に所属する教師資格を有するもの。年齢40歳くらいまで  
<問合せ> 名古屋教区教化センター(担当 蓮谷) 電話 052-323-3686

## 2014あいち・平和のための戦争展

「戦争する国」を許していいのですか？ 私たちは国の武力行使を認めません  
—教化センターからも出展します—

<と き> 8月9日～12日 午前10時～午後6時(入場受付は終了30分前まで、最終日は午後3時終了)  
<と ころ> 名古屋市公会堂4Fホール 地下鉄鶴舞線「鶴舞駅」徒歩3分、JR 中央線「鶴舞駅」徒歩2分  
<入 場 料> 一般 500円(高校生以下、障がい者(介助者含む)無料)  
<問 合 せ> 2014あいち・平和のための戦争展実行委員会 電話 052-931-0070

### 《編集子雑感》

今回のイラストカット集には東本願寺キャラクター「蓮ちゃん」が登場しています。

蓮ちゃんは地元愛知県出身の十七歳の女性なのですが、みなさんご存知でしたか？

この蓮ちゃんははじめ、東本願寺キャラクターは現在東本願寺に住んでいて、日程さえ合えば、各お寺にも遊びにきてくれます。ほかには、蓮ちゃんのお父さんで大阪府出身の「鸞恩くん」と、蓮ちゃんと鸞恩くん親子が大事にしている青森県出身の「あかほんくん」がいます。

子どもたちに大人気の「蓮ちゃん」を、お寺の行事に呼んでみてはいかがでしょうか？(り)



東本願寺キャラクター  
蓮ちゃん

### ■教化センター

<開 館>

月～金曜日 10:00～21:00  
土曜日 10:00～13:00  
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

<貸し出し>

書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

# イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- ・データを希望される場合はお問い合わせください。
- ・差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。  
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。